

# 博物館 Dictionary No.192

◆あなたに語る・時代を超えて生きる心◆

へいせい ち しんかん きんこう てんじ ぶつぐ  
平成知新館1F-5(金工)に展示されている仏具について勉強してみよう。

## けまん 華鬘 ほとけ かざ ぶつぐ 仏の世界を飾る仏具



図1 インドの大菩提寺にて

8月はお盆の季節。お寺さんにお参りに行く方もいらっしゃることでしょう。お寺の中にはいろいろな道具があります。仏像の前には大きい机が置かれ、そのうえには花をいける華瓶や、お香をたく香炉、蠟燭をさす燭台などが乗っています。柱には細長い幡(はた)

や、丸い形をした華鬘という飾りがかけられていることがあります。お堂の軒先で鰐口を鳴らしたり、大晦日に除夜の鐘をついたりしたことはありませんか?このように仏教で使われる道具を「仏具」といいます。仏具にはいろいろな種類がありますが、主なものは、仏像や仏堂の中を飾る(荘厳する)「荘厳具」、お坊さん(僧侶)が使う「僧具」、たいて音を鳴らす「梵音具」に大きく分けられます。今回は荘厳具のひとつ「華鬘」についてご紹介します。

「華」は花、「鬘」は植物のつるを編んで頭につけた飾りのこと。つまり「華鬘」とは、花を編んで作った飾りという意味です。仏教が生まれたインドでは、昔から実際の花(生花)に糸を通して連ねた花飾り(レイ)を首などにかけて身を飾る習慣がありました。それが仏教では、仏堂や仏塔に捧げ、仏の世界を美しく飾るという行為になったのです。『毘尼母経』という古いお経(4~5世紀に成立)では「華鬘は人が身に着けるのではなく、仏や仏塔を飾るのに使うのがよい」と書かれています。最近インドに行ったときのこと、お釈迦さまが悟りを開いたブッダガヤのマハーボディ寺(大菩提寺)では、多くの人が



図2 インド大菩提寺の仏塔にかけられていたレイ

生花のレイを仏塔に捧げており、この習慣は今に息づいていることを改めて感じました。

(図1・2)

さて実際の花では、いずれ萎れてしまいます。そこで、より耐久性のある素材で華鬘を作るようになりました。先にあげた『毘尼母経』には、花がない時期には木や金属や布で華鬘を作ればよいと書いてあり、かなり古くから行われていたようです。日本でも仏教の伝来とともに、堂内に華鬘をかけるようになりました。材質は銅で作り金メッキしたものが圧倒的に多く、ほかに牛の皮や木で作って彩色したものもあります。残っ



図3 重要文化財  
金銅種子華鬘 奈良国立博物館蔵

ている最も古い華鬘は奈良時代8世紀のもので、正倉院宝物に銅製金メッキの作品、奈良・唐招提寺に皮製彩色の作品が伝わります。平安時代にもたくさん作られたことが記録からわかりますが、多くが「華鬘代」と書かれており、「代」は生花の代わりの材質を使ったという意味とも考えられます。

写真でご紹介する華鬘は、2つとも金属製です。銅で作った表面に金メッキをしています。奈良国立博物館の作品(鎌倉時代13世紀)(図3)は、蓮華の花を連ねた形で、中央に仏教でよく使われる「種子」(サンスクリット文字)

を表しています。この種子は「バン」で、大日如来を表していると考えられます。もう

一つは滋賀県・神照寺に伝わる華鬘(室町時代15世紀)

(図4)で、やはり銅製金メッキの作品です。団扇形のフレームの中に、蓮華をいけた華瓶が表されています。

2つとも中央に紐を結んだ形(総角といいます)があるのわかるでしょうか。これはかつて、生花を結んで

いた紐の名残と考えられています。神照寺の華鬘の

下には鈴や細長い飾りが垂れ下がっています(垂飾)が、

たいていの華鬘にも同じような飾りが付けられています。特に金属製の華鬘は重く、簡単には揺れたりしないので、この鈴も垂飾の意味合いが強いのかもしれま

せん。

今でもお寺の堂内に華鬘がかかっているのを時おり目にします。みなさんも次にお寺に行かれたとき、ぜひ華鬘を探してみてください。



図4 重要文化財  
金銅透彫華鬘 神照寺蔵

(企画室長 伊藤信二)